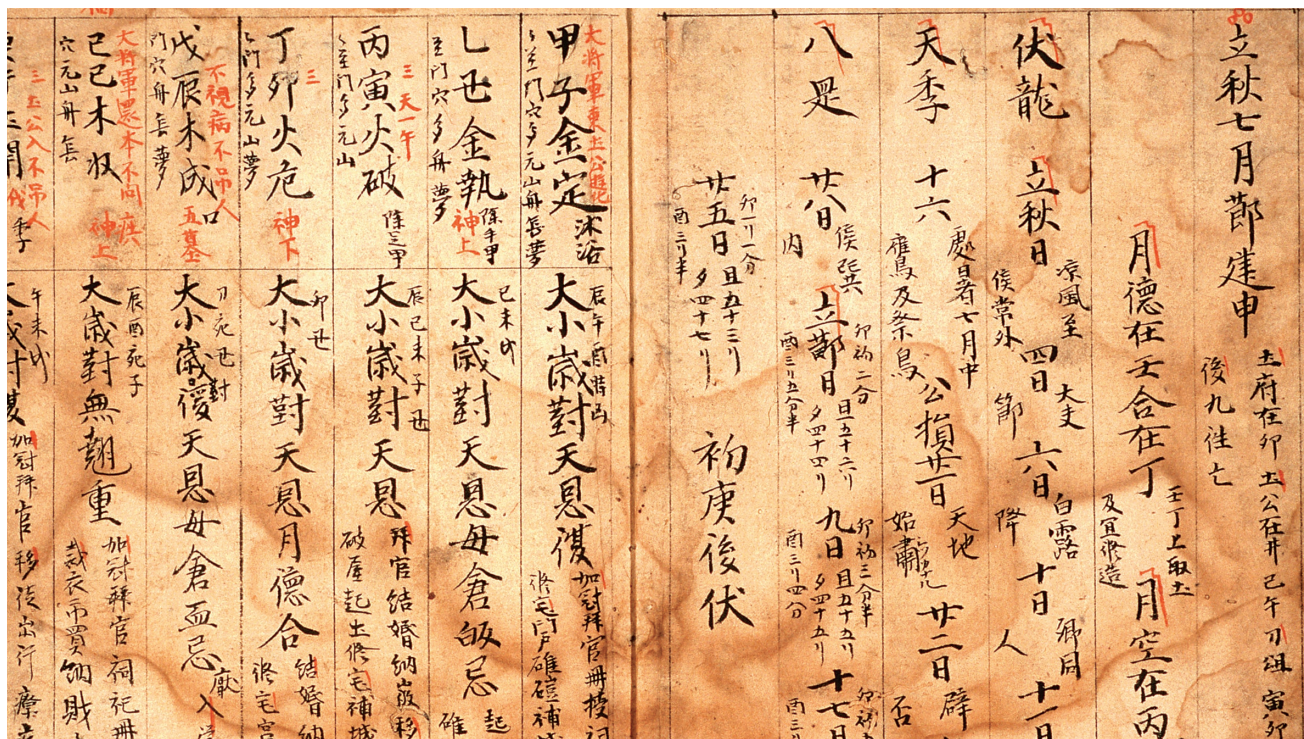


漢字と情報

No. 13
2006・10



京都大学人文科学研究所 Documentation and Information Center for Chinese Studies (DICCS)
 附属漢字情報研究センター Institute for Research in Humanities, Kyoto University



- 拓本のでざわり
- プリンストン高等研究所の東洋学（下）
- 人文研アーカイブス(13) 大唐陰陽書

拓本のとざわり

宮宅 潔

去る三月十一日、第2回「TOKYO 漢籍 SEMINAR」が「三国鼎立から統一へ—史書と碑文をあわせ読む」とのテーマで開かれ、筆者は講師としてこれに参加した。この第2回セミナーの母胎となったのは、2000年度より5年間にわたって行われた共同研究班、「三国時代出土文字資料の研究」班における研究成果で、筆者が講師として登板することになったのも、その班員に名を連ねていたためである。

この研究班は三国時代から晋代の碑刻を読み進め、『魏晉石刻資料選注』を最終的な成果として発表し、終了した。これに次いで「北朝石刻資料の研究」班（班長：井波陵一）が組織され、北魏時代の石刻史料を今は会読している。

班名が変わり、メンバーも入れ替わったが、会読の進め方は前研究班のそれを踏襲していて、碑

刻の中身を読み始める前に、その石刻の、研究所所蔵の拓本が広げられ、班員一同でひとしきり眺め回す。そのうえで各著録の釈文や他所の拓本ともつき合わせて、一字一字の釈読を確かめている。石刻史料の会読は他にも行われているが、まず拓本現物を実見することから始められるのは、恵まれた環境にあるというほかない。

そもそもこの研究班自体が、研究所の先人が苦勞して収集した拓本史料をより有効に活用し、広く外部にも公開することを目指して始められた。拓本の公開については、すでにそのデジタル画像が漢字情報研究センターのホームページ (<http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/>) に公開されており、漢代より元代に至るまでの拓本をウェブ上で閲覧することができる。こうした試みの一環である以上、会読の対象も所に拓本のある石刻に限られる。成果報告書の名が「選注」となっていた所以である。

ただし所蔵史料を公開するといっても、よそまに胸を張ってお見せできるような善拓はさほど多くない。むしろ、ほとんどがありがたふれた拓で、



禪国山碑 吳天璽元年(276)刻。篆書。43行、行ごとに25字。江蘇省宜興県張諸鎮の西南50里の薰山上に現存。



あまり素性のよろしからぬものさえ含まれる。とはいえその数は約1万点にのぼり、一つの碑について複数の拓本が所蔵されているものも少なくない。会読の際には大机狭しと拓本が並び、こっちは見える、これは駄目だ、という声が飛び交うことになる。ともかく数量においては、これに匹敵する拓本コレクションは多くなかろう。ただそれゆえに、拓本をいちいち表装するわけにもゆかず、若干の拓本を除いて、折り畳んで封筒にいれ、それらを函に収めて保管している。会読の最初に拓本を実見する際にも、それを取り出して、ごそごそと広げることになる。見栄えは悪く、保存のためにも最適とはいえないのかもしれないが、とはいえ表装しないというのは積極的な選択でもある。裏打ちすると、拓本の元の姿が失われてしまうおそれがあるためである。

積読の当否を問題にするだけなら、法帖仕立ての拓本の方が扱いやすい。けれどもそれでは石刻の姿、いったいどれほどの大きさの、どういう形の石に文字が刻まれていたのか、ということは実感できない。拓本をそのまま表装したものなら、確かに碑の姿は実感できるが、あまりに均滑なその表面は、時としてそれが石から採られたものであることを忘れさせる。採拓した後の、石の凹凸をなおも残したような拓本を広げてゆき、その隅っこをつまんで手触りを確かめていると、石刻全体の姿が、その表面のざらつきまでも彷彿とされる思いがする。

件の漢籍セミナーで私が取りあげた碑の一つに

「禪国山碑」がある。これは三国呉の最後の皇帝である孫皓が、相次いで現れた符瑞を記念して陽羨県の国山で封禪の儀式を行い、そのあとで立碑したものである。執拗に列举される符瑞の数々や、篆書によって書かれていることが強烈な印象を与える碑であるが、その形状も一風変わっていて、円筒形というか、釣り鐘型というか、俵を縦に立てたような形をしており、その周囲にぐるりと文字が刻まれている。実は、これとよく似た形の石刻が同じく呉の領域にある。会稽郡山陰県、いまの紹興市の禹廟にある「窆石」がそれで、上下に二つの石が重ねられた構造になっており、禪国山碑より小ぶりであるものの、全体の形状はそれとよく似た釣り鐘型をしている。この石は禹がここに葬られた際、棺を墓穴に下ろすために用いられたとされるが、実際の立碑時期は定かでない。ただ碑には篆書の刻文があり、それを他ならぬ孫皓によるものとする伝承がある。

いくつかの石が重ねられた碑といえば、「天發神讖碑」が思い出されよう。これも孫皓の時代に立てられたもので、これもまた独特の篆書を用いて、神の言葉が刻み込まれている。原石はすでに失われているが、「三段碑」の別名が示すとおり、三つの石が組み合わされてできており、その姿は「釣り鐘形」であったとの証言がある。羅振玉「呉天發神讖文補考」(『羅雪堂先生文集』第六編)が指摘するとおり、こうした形状がどうやら呉碑の一形式であったらしい。

石刻は中国における漢字文化の一部であり、有用な文字史料である。けれどもその文字を背負っているのは石であり、それはただの書写材料として、単に紙の代わりをしているわけではない。活字に起こされた碑文の中身だけを相手にしていると、ややもすれば忘れてしまいそうになるけれど、石刻はあくまでモノであり、とりわけ一定の形式とサイズをもつ碑は、いわば巨石文化の一部であるともいえる——班員の方々に交じって拓本のてざわりを確かめながら、こんなことを考えている。

(人文科学研究所助教授)

プリンストン高等研究所の東洋学（下）

石川禎浩

プリンストン大学の東アジア図書館（入り口は Frist Campus Center にある）は極めて充実している。いわゆる「漢籍」の分野別整備状況や宋版、明版など稀覯本の具体的状況については、ここに論評するだけの紙幅も知識もないが、わたしが専門とする中国近現代史に限って言えば、わが漢字情報研究センターと京大文学部図書室の蔵書を合わせたくらいの質と量は充分にあった。特に、中国革命史や中共党史といった分野の充実ぶりが印象的で、どんなルートで入手したのか、想像すらつかない「内部発行本」や資料も散見した。

同図書館は開架式で（一部の図書は Forrestal と呼ばれる別館にあり、取り寄せるのが翌日になる）、入館するのに一応利用証を提示することになってはいるが、実際にはほとんどの人がそのまま入ってしまう。また、コート、カバン、パソコンなども持ち込み可なので、いったん書庫に入れば、そのままそこで仕事ができるようになっていて、はなはだ使い勝手がよい。退館時に受付係にカバンを開けて見せて、無断持ち出しをしていないことを示せばそれでよいのである。したがって、本の貸し出しさえしないのなら、誰でも手続きなしに入館、閲覧ができるということになる。

こうして、木製の書架のならば雑誌バックナンバー室で、木机に本を広げると、そこには静謐な時間だけが流れるというあんばい。前号で述べたように、この書庫のある現在の Jones Hall は、かつて Fine Hall と呼ばれていた頃に高等研究所 (IAS) が間借りしていた建物である。かのインシュタインの研究部屋も一時はここにあって、あるいは胡適もこの書庫で本を探したに違いないなどと思いを馳せれば、読書の喜びもまた格別なのである。もっとも、アメリカの開架式の図書館

はどこでもおおむねそうだが、ここでも本の無断持ち出しや書庫内の学生用机への放置などがあって、検索した本がしばしば配架場所になく、難渋することも少なくなかった。



さて、このように恵まれた研究環境にあって、IAS ではどのような東洋学研究が進められているのか。前述のとおり、IAS は研究者個人の知的探求心をすべてに優先しているのであって、色々な研究会についても、出るも自由、出ないも全く自由である。ただ、東洋学についていうと、せっかく世界から東洋学の研究者が集まっているのだからということもあり、毎週1回火曜の午前中に所内の小会議室でフォーゲル教授の主宰する東アジア学セミナー（毎回2時間）があった。ちなみに、2001-02年にIASのメンバーで、東アジア史を専門にしていたのは、Henrietta Harrison（英 リーズ大学）、Catherine Jami（仏 C. N. R. S.）、熊秉真（台湾 中央研究院）など、わたしを入れて10人ほどだった。

セミナーは、毎回一人が1時間ほど報告をし、それを受けて討議をするという形式であり、これ

は主宰する教授が変わった今日でも続いている。参加者（だいたい10～15人）は、IASのメンバーやプリンストン大の教員が中心で、報告テーマによっては、ニューヨークやフィラデルフィアからも研究者がやってきた。毎回のセミナー予定は、メーリングリストを通じてプリンストン大の関係分野の研究者や院生にも通知され、またプリンストン大で開催される東洋学関連の講演会、ワークショップなどの予定も我々IASのメンバーに通知された。

セミナーは、報告テーマが東アジアのどの国を対象にするものであっても、すべて英語でなされたが、これは英語に弱いわたしには、大変な苦行であった。前号で紹介した朝永振一郎博士は、IASでの悩みの最大のものに、「コトバがわからないこと」¹をあげておいでだが、物理の朝永先生にしてかくの如くであれば、文系のわたしに、聞いたこともない現代思想の専門用語が頻出する中国史の英語報告などわかるはずがない。そもそもこちらは、例えば「フィリアパーティ」と聞こえても、それが *filial piety* のことだ、つまり「孝」の訳語であることすら知らないのだから。



わたしの報告や質疑応答にしたって、これまた朝永先生と同様、「人の云うことの中に二つか三つ聞きとれた言葉があるとあとは想像でおぎなって判断するのですから、定めしトンチンカンなことが多いこと」だったろう。

IASの東アジア学セミナーにおけるフォーゲル氏の精力的な仕事ぶりは、極めて印象的であった。とりわけ彼の主宰のもと、2002年2月に二日間の日程で行われたワークショップ（How Did “China” Become China and How Did “Japan” Become Japan : Teleologies of the Modern Nation-State）は、主にアメリカ国内から40人ほどを集めて行われた集中討議で、日中両国の国民国家生成の相互関係性を正面から論じたものであった。フォーゲル氏はわが人文研での共同研究「梁啓超」に刺激を受けて、梁啓超を媒介にして中国の国民国家形成に与えた明治日本の役割を探求する国際会議を開いており²、IASでのワークショップは、その関心をさらに拡大させたものと言ってよい。成功裏に終わったこのワークショップの成果は、その後間もなく公刊された³。

このように、高等研究所の歴史学部門（東洋学）は、資料利用の面でも、また研究環境の面でも、まれに見る好条件で世界の研究者を迎えている。大学と共にプリンストンの歴史学研究を支える両輪と言ってよかろう。日本では、この研究所に文系分野でもメンバー招聘の制度があることはあまり知られていないが、同所は毎年メンバーの公募を行っており、我が国からも多くの東洋学研究者が赴いてほしいものである。

（人文科学研究所助教授）

- 1 「早川幸男あて書簡（1949年10月10日）」『朝永振一郎著作集』第6巻所収。
- 2 1998年9月にUC Santa-Barbaraで行われたその会議の論文集は、このワークショップを挟んで出版された（Joshua Fogel ed., *The Role of Japan in Liang Qichao's Introduction of Modern Western Civilization to China*, Berkeley, 2004）。
- 3 Joshua Fogel ed., *The Teleology of the Modern Nation-State: Japan and China*, Philadelphia, 2005.

人文研アーカイブス (13)

大唐陰陽書 下卷(卷第三十三)

唐呂才撰

武田時昌

唐代には、二つの「陰陽書」が著された。一つは呂才撰『陰陽書』53卷、一つは王琰撰『新撰陰陽書』30卷。ともに日本に伝来し、天文暦道（陰陽道）の基礎文献となった。『大唐陰陽書』は、呂才撰『陰陽書』のほうと考えられている。

本書の内題には「大唐陰陽書卅三 下卷 開元大衍 曆注」とある。呂才が太宗の命で陰陽書の修訂を完成させたのは貞観15年（641）4月16日であるから（『唐会要』36）、開元17年（729）から上元2年（761）まで33年間用いた大衍曆の曆注であるはずがない。そこで、広瀬秀雄氏のように、元慶元年（877）7月22日太政官符に見られる『大衍曆注』2巻と比定する異論もある^{*1}。

本文の構成は、まず「立秋七月節建申」の場合について、節気、七十二候、六十卦の他に、月徳、月空、三鏡や伏龍の所在（7月は配当がないから空欄）等をそれぞれ記した後に、曆注の一覧表を掲げ、さらに天道、天殺、月殺を記す。一覧表は二段に分かれていて、甲子から始めて癸亥に至るまで60通りすべてについて、上段に納音、十二直、下段には各種曆注を列記する。7月に出てくる順に曆注を例示すれば、大小歳神の前後対位、天恩、復、母倉、皈（婦）忌、月徳合、血忌、無翹（堯）、重、月殺（煞）、月徳、九坎、厭対、厭、三陰、陰錯、天赦、陽錯などである。三陰・陰錯・陽錯等は凶会日であるが、それぞれ個別に記すのが古法であるらしい。以下同様に、7月から12月の下半期について月別に曆注配当表を掲げる。六十干支の組み合わせをすべて網羅しているから、特定の年月に対する具注曆の一部ではない。前掲の曆注は各月（正確には十二節）ごとに干支によって定められる（ただし天恩・重日は節切りでは

なく特定の干支による）。したがって、その歳の曆日が決まればこの一覧表からそのまま転載すればよい。まさに曆注作成のためのハンディな汎用マニュアルなのである。

呂才の『陰陽書』は、中国では宋代に散佚してしまい、全貌はわからない。しかし、敦煌出土の具注曆と比較すれば、この曆注スタイルが大衍曆に限らず用いられている。また、当時の陰陽書、五行書には陰陽五行や六十干支を基軸とする種々の配当説が展開されていたと思われるから、それらを包括的に整理した呂才撰『陰陽書』とするほうが蓋然性は高い。『陰陽書』として引用される佚文のなかで、『後漢書』郭鎮伝、王符伝の李賢注が引く帰忌日や反支日、『初学記』巻4に引く伏日等の記述は『大唐陰陽書』と内容的に符合しており、しかも郭鎮伝では「歴法」という篇名？を掲げる。それが曆注詳説の存在を裏づける。

日本では、天平宝字7年（763）に採用（翌年に施行）されてから貞観4年（862）に宣明曆の施行されるまで大衍曆を用いていたから、その間に曆道家が曆注作成の種本として『（大唐）陰陽書』巻32、33を抄出して上下2巻としたのであろう。大谷光男氏が静嘉堂文庫蔵『大唐陰陽書』と現存具注曆との比較を試みているが^{*2}、それによれば長徳5年（長保元年、999）の具注曆の種本となっていることは明らかである。また、正倉院に残る天平勝宝8歳（756）具注曆（儀鳳曆）との近似性から大衍曆施行以前にすでに用いていた可能性も考えられる。

なお、11月節大雪後の七十二候である「虎始交」は「武始交」に変わっている。敦煌出土の具注曆でも「武始交」となっているおり、唐代の避諱と考えられるが、日本では江戸の貞享曆で新制七十二候に改変するまでずっと踏襲された。『礼記』月令等の記載によって文字を改めてもよさそうなのに、そのままにして「武」を「トラ」と訓じてきたのは、『大唐陰陽書』の影響力の大きさをほのめかしているのかもしれない。

ところで、書写と伝本の経緯を知る手がかりは

奥書に詳しい。すなわち、「此書兩卷以陰陽頭兼曆博士位五位下賀茂保憲朝臣本写伝也」とあり、賀茂保憲所持本からの転写である。さらに、その藍本の奥書を引用するが、それによれば大春日朝臣真野麻呂が嘉祥元年（848）7月5日に書写した春家本の上下兩卷と対校したことがわかる。嘉祥元年にはまだ大衍曆を用いており、抄本を「開元大衍曆注」と記していたことも頷けるだろう。実は、その13年後に宣明曆の採用を進言したのが真野麻呂にほかならない。

真野麻呂や賀茂保憲は中世を代表する曆博士であるから、まことに由緒正しい。保憲本の奥書と思われる注記に「数家の説が校合されており、曆家代々に伝えられたきテキストに誤謬がないから、もし他本とつき合わせて違いがあるなら、そちらの誤りであるとすべきである」と述べるのは、もっともなことである。

さらに、奥書の末尾には、校合したテキストとして「曆儒家仁宗・統・増命五所本」と「醍醐寺増本」の2本の存在を語る。仁宗は唐に渡って符天曆を学んだ興福寺の僧、仁統・増命はその弟子である。なお、「五所」は他本では「五師」に作っており、寺職である。

本文の本文の冒頭には凶会日作法（行佷（行痕、中国では行狼）・了辰以下の凶会日の細目がどのような凶事を意味するかを注解したもの）、末尾には別に甘露・金剛峰・羅刹の12月配当表がある。後者は七曜によって配当が決められているように、『宿曜経』を原拠とする宿曜道系の曆注であり、具注曆では日付の左右に記載された。それが原書にあったとは思えないから、後世に書き添えられた注解が本文に紛れ込んだにちがいない*³。仁宗達は保憲の後を継いだ曆博士と協力して造曆に関与した。それは符天曆による星算であり、曆注そのものではないだろうが、彼らも『大唐陰陽書』を学んだことがわかる。それ以前から陰陽道と宿曜道の曆注は具注曆ですでに混在するが、両道交流の痕跡をここに見ることができる。

賀茂保憲は陰陽道宗家を二分したことで知られ

るが、陰陽道関連書の伝存本には、大別すれば賀茂家と安倍家の2系統がある。それは『大唐陰陽書』でも同様である。

残卷の上巻はまだ発見されていない。しかし、同じ奥書のある写本が東京大学史料編纂所、国立天文台（外題「宣明曆二十八宿吉日考入」）、静嘉堂文庫、国立公文書館（旧内閣文庫）等に残存し、前2本は上下巻揃いである。また、天理図書館吉田文庫に別系統のテキストがある。その奥書によれば、嘉暦二年（1327）写本を安倍有春が転写した安倍家伝来本を卜部（清原）宣賢が天文11年（1542）に書写したものである*⁴。

人文研所蔵本の奥書の後には、私曆盡次第や朔宿（朔望宿）・甘露・金剛峰・羅刹・歳下食日・往亡畧頌・除手足甲・八官神（八将神）等の配当表があり、末行に「天文生安倍」と記されている。

まさか賀茂保憲から天文道を授かった安倍晴明ではないだろうが、天文曆家、陰陽師、宿曜師や吉田神道の卜部家に至るまで『大唐陰陽書』をめぐる諸家が勢揃いしている感がある。保憲・晴明以後の曆術、占術と仏教、神道の複雑な関係性や師弟相伝の事情を密かに伝えているのである。

なお、本書がセンター書庫に入る経緯には、近代の天文曆学者によるもう一つのエピソードがある。それについては、次号に別稿を予定している。（センター教授）

* 1 広瀬秀雄『曆』77頁（日本史小百科5、近藤出版社、1978）

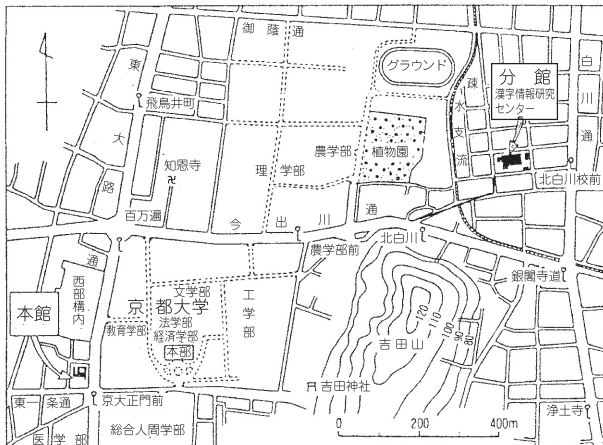
* 2 大谷光男『東アジアの古代史を探る』（大東文化大学東洋学研究所刊、1999）、「麟徳具注曆（正倉院）と宣明具注曆（敦煌）」（『二松学舎大学東洋学研究所集刊』31、2001）。

* 3 山下克明氏によれば、延喜19年曆（919）に羅刹が記されており、その頃から宿曜系の曆注が用いられるようになった。『平安時代の宗教文化と陰陽道』（岩田書院、1996）参照。

* 4 他に、東北大学に『曆注』として、茨城県六地藏寺所蔵『長曆』に「開元大衍曆抄」として上下巻が転載されている。中村璋八『大唐陰陽書考』（『日本陰陽道書の研究』増補版所収（汲古書院、2000）、『山下克明「『大唐陰陽書』の考察」（『東アジアの天文・曆学に関する多角的研究』（大東文化大学東洋研究所、2001）参照。

HP・TOPICS

今回は、人文学研究部の田中雅一教授のHPを紹介します。フレーム付きのおしゃれなデザイン&コンテンツは、文化人類学者にふさわしい匂い?を漂わせています。公開中のデータベースにマイクロ人類学関連文献・性文化研究基本文献資料・南インド寺院管理判決文等があり、共同研究の成果が満載されています。ただし、主要検索語にちょっとドキッとさせられるかも。また、リンク集も文化人類学・インド・性文化・軍事共同体等々でとても充実しています。なお、トップページの絵(下図参照)は、自分をスリランカからハワイ、トロントに至る調査の旅に導いた聖者ヨーガスワミだとか。



【DICCS NEWS】

- ・10月にセンター係長の町美稚子さんが宇治地区事務部経理課に異動になった。3年半の長きにわたってセンター及びCOE事務局の運営にご尽力いただき、感謝申し上げます。後任には、工学研究科経理課より渡辺久吉氏が着任した。また、それに先だって今春4月に、センターの若きホープ!?として活躍した大西賢人氏も奈良先端科学技術大学院大学教育・研究支援部学術情報課に転出し、代わって滋賀大学教育学部図書館より櫻井待子さんが着任した。
- ・2006年度の漢籍担当職員講習会は、10月2日(月)～10月6日(金)に初級を実施し、23名の修了者があった。中級は11月6日(月)～11月10日(金)で、16名の参加を予定している。講師陣は、センター及び所内スタッフに加えて、所外から村上衛横浜国大助教授を招き、現代中国書について講義してもらった。
- ・「第3回 TOKYO 漢籍 SEMINAR」を来年3月10日(土)10:30～16:00に開催する予定である。今回のテーマは「陽關以西—漢籍資料から見た西方社会」(コーディネーター:高田時雄教授)である。なお、会場は一昨年に実施した学術総合センター2階中会議場になったので、お間違えのないようにしていただきたい。演題と講師は以下の通りである。
 - 「大唐西域記の成立」
高田時雄(京都大学人文科学研究所教授)
 - 「唐蕃會盟碑への道」
岩尾一史(日本学術振興会特別研究員)
 - 「漢籍資料から見た唐代アフガニスタン」
稲葉 稜(京都大学人文科学研究所助教授)
- ・最新のセンター刊行物
「東洋学文献類目」2003年度(2006年3月)

発行日 2006年10月31日

発行所 京都大学人文科学研究所附属
漢字情報研究センター

〒606-8265 京都市左京区北白川東小倉町47

電話 075-753-6997 FAX 075-753-6999

<http://www.kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/>